



Title	月刊DRF 第63号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2015-04-01
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/73618">http://hdl.handle.net/2115/73618</a>
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; <a href="http://drf.lib.hokudai.ac.jp/">http://drf.lib.hokudai.ac.jp/</a> で公開したもの
File Information	DRFmonthly_63.pdf



[Instructions for use](#)



# 月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

## 第63号

No.63 Apr. 2015

JaLC DOIスタート講座 ～マルチプルレゾリューション編～  
【レポート】 機関リポジトリ新任担当者研修会（東日本・西日本）  
機関リポジトリ推進委員会 海外動向調査レポート  
JaLC活用の為の対話・共創の場（第2回）  
第4回 SPARC Japanセミナー2014  
【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常 第11回

## 機関リポジトリ担当者のためのJaLC DOIスタート講座 ～マルチプルレゾリューション編～



博士、DOIにはマルチプルレゾリューションという機能があるようですが、どのようなものなのでしょう？また、リポジトリ担当者は何をすればよいのでしょうか？

ふむ。JaLC DOIの登録も始まり、色々な疑問がうまれてきているようじゃの。では、今回はほ子くんの疑問について、答えようかのう。



### ① マルチプルレゾリューションを知る

前回の講座(月刊DRF60号)では、「DOI (Digital Object Identifier)によるアクセス機能」を紹介しました。「<http://doi.org/>」に続けてDOIを入力してアクセスすれば、論文などがあるURLにたどり着けるというものです。

ところで、論文が公開されているURLは1カ所だけと言い切れるのでしょうか？答えはNOです。

例えば、国立国会図書館(NDL)は電子化した博士論文へDOIの付与を行い、著者の許諾の範囲での公開を行っています。しかし、その博士論文が機関リポジトリでも公開されていることは珍しくありません。このような時、「1つのDOIに複数の公開先URLを関連付ける」ことが

できれば便利ですね。この機能を「マルチプルレゾリューション」と呼びます。こうすることで、利用者は複数の公開先URLの中から好きなアクセス先を選択することができます。

マルチプルレゾリューション		
DOI	登録機関名	最終更新日
10.11501/3119558		
1	国立国会図書館 / National Diet Library	2015/02/05
2	機関リポジトリ / Institutional Repository	2015/02/10

図：公開先一覧の例

多くの場合、利用者には公開先一覧が提示されるぞ。  
例えば、マルチプルレゾリューションが設定されたDOI:10.11501/3119558にDOIによるアクセス機能を使うと図のようになるのじゃ！

### ② マルチプルレゾリューションを設定する

2015年4月1日現在、マルチプルレゾリューション機能は、NDLで公開されている1991～2000年度、2013年度以降の博士論文でのみ行われています。この機能を実現するためには、機関リポジトリとNDL、2つの公開先URLを博士論文のDOIに設定しておく必要があります。設定方法は以下の通りです。

1991～2000年度の博士論文：NDLが既に付与しているDOIを、機関リポジトリにSelfDOIとして設定します。  
2013年度以降の博士論文：機関リポジトリで先にDOIを採番し、NDLによるメタデータ収集が行われた後に、NDLにおける公開先URL情報がDOIに付加されます。

JaLCは、これらの情報を基にDOIと公開先URLをマッチングし、マルチプルレゾリューションの設定を行います。

\* NDLで学位論文に付与されたDOIは、リストが提供されています。

<http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/dlib/cooperation/doi.html#anchor03>

# 機関リポジトリ推進委員会 新任担当者研修会レポート

機関リポジトリ推進のための人材育成を目的とし、国内2カ所（仙台・岡山）で開催された「機関リポジトリ新任担当者研修会」（主催：機関リポジトリ推進委員会/共催：デジタルリポジトリ連合）。JAIRO Cloud登場によるリポジトリ構築機関の増加もあり、各会場とも申込締切前に定員に達するなど、関心の高さがうかがえました。熱気あふれる両会場の様子をレポートしていただきます。



機関リポジトリ推進委員会コンテンツワーキンググループ主査の杉田茂樹さん（千葉大学）に、今回の研修会企画のポイントについてお話を伺いました！

NII学術ポータル担当者研修（平18～22）からDRF機関リポジトリ新任/中堅担当者研修（平23～24）へと受け継がれた担当者研修が、1年間のブランクを経て、機関リポジトリ推進委員会主催「機関リポジトリ新任担当者研修」として復活しました。

今回の研修では、我が国で機関リポジトリ運営が始まって以来約10年の間に創案された日々のコンテンツ収集業務について、筑波大学、東京歯科大学、金沢大学、京都大学から具体的なレクチャーがありました（「コンテンツ構築のルーチン」）。

本誌16号（平成23年5月）に『機関リポジトリ担当係年間計画モデル』があります。こうした年間スケジュールを基軸として、では具体的に今日何をして明日何をすればいいのか。平常業務の組み立てを考える一助となっただけではないでしょうか。

DRF主催研修会以来久々の実施となる、新任担当者向け研修会。今回は機関リポジトリ推進委員会の重点項目である人材育成の一環として、同委員会主催で開催されました。JAIRO Cloudの登場を背景に、機関リポジトリ構築機関は私立大学を中心に年々増加傾向にあり、担当者の育成は各機関の喫緊の課題となっています。今回の研修会もそれを反映するかのよう、申込受付開始後早々に満席となり、北は北海道から南は九州まで、全国から多くの参加者が早春の仙台に集まりました。

東日本会場のプログラムは主に未構築・構築後間もない機関を想定し、従来の研修会における科目に加えて、研究者の視点による講義および導入戦略・紙資料の電子化・学位規則改正に関する補講が行われました。特に機関リポジトリ概論では、受講生が参加して出版社と研究者の関係を寸劇で表現するなど、リポジトリの背景にある様々な要素について楽しく学ぶことができました。総じて盛り沢山の内容にもかかわらず、「もっとじっくり聴きたい」といった意見が多数出され、参加者の関心の高さがうかがえました。

分科会では似通った課題を持つ機関の参加者と講師による意見交換を行いました。活発な議論を通じて機関の枠を越えた担当者同士の繋がりが生まれる様子を、さらなる機関リポジトリコミュニティ拡大の可能性を感じた一日でした。

佐藤 恵（東北学院大学）

## 【東日本会場】

日 時：平成27年2月20日（金）  
10:00～17:45

場 所：東北学院大学（宮城県仙台市）

参加者：40名

## 参加者の声

本学でも機関リポジトリを構築していきたいと考えていたため、参加させていただきました。

予備知識も殆どない状態でしたが、きめ細かく丁寧な説明と事例紹介で、構築過程を明確にイメージする事ができました。小規模機関でも、思っていたよりも簡単に安価に構築できるとわかり、研修後は「早速構築したい！」とモチベーションが上がりました！他機関の担当者の方とお話する機会を設けていただいた事も、とても勉強になりましたので、今後の構築・管理に役立てたいと思います。

講師・スタッフの皆様、本当にありがとうございました。

酒井 麻紀（仙台青葉学院短期大学）

【西日本会場】

日 時：平成27年2月27日（金）

10:00～17:30

場 所：岡山大学（岡山県岡山市）

参加者：42名

機関リポジトリとオープンアクセスにまつわる知識、事例を盛り込んで皆さんに詰め込んだ（詰め込まれた？）、大変充実した1日でした。特に、栃内新先生（北海道大学）、岡本健先生（奈良県立大学）からは、研究者の視点で機関リポジトリへの期待と活用が具体的に語られ、実務担当者としては大変興味深く聞くことができ、また勇気づけられました。

グループディスカッションにおける学位論文に関する活発な議論は、今後、事例が多く蓄積されていくことを予感させました。一方で、学術雑誌論文の収集を始めるためには何をやったら良いかわからない……という悩みはあまりに対照的で、国内機関リポジトリ運営の現状の課題が明確になっており、大変印象的でした。

アンケート結果によると7割近くの方が機関リポジトリ初代担当者であり、6割の方が1-2名で担当しているそうです。「何から始めたら良いかわからない」、「相談できる人もいない」という人こそ、DRFやJAIRO Cloudのコミュニティを積極的に活用することが大切だと感じた研修会でした。

阿部 潤也（東京歯科大学）

参加者の声

2月27日に岡山大学で行われた「機関リポジトリ新任担当者研修」に参加しました。各講義30分で、概論から著作権、広報、今後の展望まで多様な内容を一気に学ぶことができました。「メタデータ」のところがデータと収集の両方について内容が盛り沢山なので、もう少し時間をとってよかったのではと思いました。

「研究者と学術研究プロセス」の講義で、機関リポジトリが自分の研究にどう役立ったかという教員によるお話は大変面白く、担当者のモチベーションの上がる内容でした。事例報告や分科会では他機関の業務の様子を知ることができました。貴重な機会を与えていただき、関係の皆様には大変感謝しております。

木下 直（千葉大学）

東日本会場



「機関リポジトリ概論」鈴木 雅子氏（静岡大学）  
研究者と出版社の関係を寸劇で



「構築・運用事例報告」  
高野 沙弥氏（田園調布学園大学）



講師を交えての情報交換

西日本会場



「研究者と学術研究プロセス」  
栃内 新氏（北海道大学）



「広報活動とコンテンツ収集」  
松本 侑子氏（広島大学）



熱い議論が続く分科会

# 機関リポジトリ推進委員会 海外動向調査レポート

2015年2月9日～2月16日、機関リポジトリ推進委員会による海外動向調査が行われ、コンテンツ・国際連携ワーキンググループより各1名が派遣されました。IDCC（International Digital Curation Conference）、Research Data Management Readinessへの参加、Southampton大学へ研究データ管理の実務調査の様子を、派遣された大園隼彦さん（岡山大学）、西園由依さん（鹿児島大学）のお二方よりレポートしていただきます。

2月8日から2月16日にかけて機関リポジトリ推進委員会からの派遣により、研究データ管理（Research Data Management:RDM）について海外の先進事例や実践を調査するために、イギリスに出張しました。参加したイベント・訪問先は以下のとおり。



IDCCワークショップの様子

2/9～2/12 @London	10th International Digital Curation Conference (IDCC) / 会期中にBristol大学インタビュー
2/13 @London	DCC/Jiscワークショップ "Research Data Management Readiness"
2/16 @Southampton	Southampton大学 訪問インタビュー

イギリスの研究助成団体の一つEngineering and Physical Science Research Council（EPSRC）は2015年5月からデータ管理に関わるポリシーを発効させます。2/13に参加したDCC/Jiscワークショップ "Research Data Management Readiness"は、そのポリシーにどう対応するかに焦点を当てたワークショップであり、イギリス国内の多くの大学の図書館員が参加していました。海外では研究助成団体によるデータ管理ポリシーの制定が、研究機関のRDMの推進要因の一つになっています。訪問時に話題となっていたEPSRCの主なポリシー\*1 を参照しながら、イギリス訪問を振り返りたいと思います。

## EPSRCポリシー

出版した研究論文に元データのアクセス方法を示すこと。研究機関は、データが作成されて12ヶ月以内に適切な構造化メタデータを公開すること

Southampton大学、Bristol大学ともDataCiteのメタデータスキーマ\*2 に準拠しており、必須項目を中心にシンプルな構成となっています。入力作成者が行いますが、特にBristol大学ではシステム間で重複入力がないように効率化されています。簡略化して登録を促す一方で、メタデータに実験方法等の詳細な記述を含めることも重要であり、IDCCではISO 19156（Observation & Measurement）に準拠したメタデータや雑誌論文に含まれる実験方法の記述をソースとしてデータセットのメタデータを自動生成する試みが紹介されていました。

DCC/Jiscワークショップでは、研究情報管理システム（Current Research Information System：CRIS）の活用例が示されました。リポジトリシステムではなく、CRISをデータ管理に活用する機関もあり、例えばLanchester大学はPure\*3 というCRISシステムをデータリポジトリとして活用しています。一方、Bristol大学やSouthampton大学はCRISをデータカタログとして利用しているとのこと。

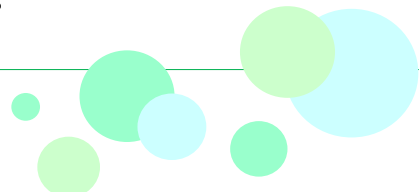
## EPSRCポリシー

研究データがデジタルデータの場合はDOIを付与すること

Bristol大学、Southampton大学ともにData Citeを介して研究データにDOIを付与しています。Bristol大学はData.bris（データリポジトリ）に登録される全てのコンテンツにDOIを付与しているとのこと（既にDOIがあるものは除く）

※DOIについての詳しい解説は [月刊DRF第60号](#) を参照ください。

Bristol大学もSouthampton大学も一目で分かるようにサフィックスに大学名やシステム名等を明示しています（例えば10.5258/SOTON/361991の場合、10.5258がSouthampton大学をあらわすプレフィックス、SOTON以降がサフィックス）。サフィックスの構成はシステムIDや連番を利用する等、機関により様々です。



EPSRCポリシー

研究機関は、研究者によるデータの独占的利用期間が終了次第、あるいは、第三者からの最終アクセス日以降、最低10年間データを保管すること

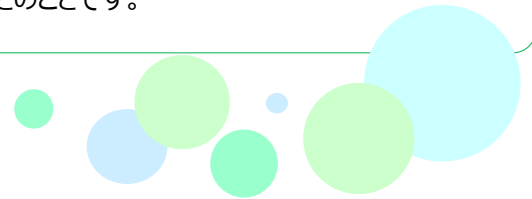
Bristol大学では最低20年間データを保持する方針で、Southampton大学のResearch Data Management Policy \*4には最低10年間の保存が明記されています。IDCC、DCC/Jiscワークショップ双方でデータセットの長期保存に関する発表があり、リポジトリシステムとArkivum \*5というアーカイブシステムとの連動する仕組みが示されていました。

EPrintsは既にこのシステムとの連動が整っており、リポジトリシステムにデータセットを登録すると自動的にArkivumにアーカイブされる仕組みで、場合によっては（例えばデータの容量が大きい場合）リポジトリシステムではコンテンツを持たずにArkivumだけがコンテンツを持つケースもあるようです。リポジトリシステムとは別にアーカイブ専用システムが登場していることに長期保存を重視している姿勢が感じられました。

EPSRCポリシー

法的、倫理的、商業的な理由で利用を制限する場合、メタデータに理由を明記すること

DCC/JiscワークショップではLeeds大学による個人情報を含むデータの取り扱いに関する事例報告がありました。データセットを高機密、機密、未分類に分け、それぞれのレベルに応じた取り扱いを決めています。例えば機密データをリポジトリで公開する場合は、アクセス制限を行い、高機密データをリポジトリで公開する場合は、暗号化した上でアクセスコントロールを設けるとのことです。Bristol大学の場合は、倫理委員会でデータの検討を行い、場合によっては公開の取り下げもあり得るが、その場合もDOIを付与したメタデータは公開を継続するとのことです。



EPSRCのポリシーでは研究者の所属機関がRDMについて第一の責任を負うことになり、遵守状況についても監視を行うということで、各機関が対応に追われています。RDMサービスを提供することが求められている図書館にとっても、図書館員の知識、スキルの向上が喫緊の課題となっています。

IDCCの“Comparing Notes: Training Librarians for Research Data Management and Open Science Support”は、RDMに関する図書館員のトレーニングをテーマとしたワークショップでした。様々なトレーニングコースを比較して新たな気付きを得ることが目的でしたが、各トレーニングコースは今後日本で参考にすべきものだと思います。

今回のIDCCのテーマは“Ten years back, ten years forward: achievements, lessons and the future for digital curation”でした。基調講演でTony Hey氏はデータ管理の10年を振り返りましたが、日本では約10年前に機関リポジトリが始まったことを考えると、その差を感じずにはいられません。しかし、昨今の情勢を顧みると、日本でも研究者サイドからRDMのサポートを求められることも予測されます。Bristol大学、Southampton大学ともにデータは大学の資産であると述べていました。我々もデータを大学の資産として考え、研究者にとって魅力的なRDMサービスを考え提供する必要があると思います。図書館員のスキルアップが不可欠です。

IDCC、DCC/Jiscワークショップの資料はWebで公開されています。詳細についてはそちらもご確認ください\*6。また、機関リポジトリ推進委員会のWebサイトで本出張報告が公開されていますのであわせてご参照ください\*7。

大園 隼彦（岡山大学/機関リポジトリ推進委員会 コンテンツ WG）  
西園 由依（鹿児島大学/機関リポジトリ推進委員会 国際連携WG）

参照

- 1 : EPSRC policy framework on research data  
<http://www.epsrc.ac.uk/about/standards/researchdata/>  
(2015/03/19アクセス)
- 2 : DataCite Metadata Schema Repository  
<https://schema.datacite.org/>
- 3 : Pure  
<http://www.elsevier.com/jp/online-tools/eri/pure>
- 4 : Southampton大学Research Data Management Policy  
<http://www.calendar.soton.ac.uk/sectionIV/research-data-management.html>
- 5 : Arkivum  
<http://arkivum.com/>
- 6 : IDCC Program with Presentations  
<http://www.dcc.ac.uk/events/idcc15/programme-presentations>  
Research Data Management Readiness  
<http://www.dcc.ac.uk/events/other-dcc-events/RDM-readiness>
- 7 : 機関リポジトリ推進委員会  
[https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/?page\\_id=31](https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/?page_id=31)



IDCCティータイム

ホテル近くのキングスクロス駅にて

## ジャパンリンクセンター活用の為の対話・共創の場(第2回) ～ 研究データへのDOI登録 ～

主催: ジャパンリンクセンター運営委員会

2015年2月27日、科学技術振興機構東京本部にて「第2回ジャパンリンクセンター活用の為の対話・共創の場」が開催されました。当日の参加者は関係者も含めて68名、多様な業界からの参加があり、本プロジェクトへの関心の高さが伺えます。



JaLC運営委員会副委員長の水野充氏（科学技術振興機構）の挨拶に続き、概要説明としてJaLCの概要（加藤斉史氏：科学技術振興機構）及びプロジェクトの背景・概要・進捗状況（武田英明氏：JaLC運営委員会委員長 / 国立情報学研究所、中島律子氏：科学技術振興機構）が報告されました。データの流通基盤を整備するにあたり、識別子の管理体制を整えることの重要性は共通理解としてあるものの、データのライフサイクルに関わる担当者の立場の違いから、DOI付与対象となるデータセットの粒度、バージョン管理の問題など、「標準的なポリシー」策定の難しさが浮き彫りになっている印象を受けました。

続いて、参加機関の取り組みとして、[DIASプロジェクト](#)（加藤斉史氏）、[北極域データアーカイブ](#)（矢吹裕伯氏：国立極地研究所）の紹介がありました。JaLCに期待することとして、両氏ともデータサイテーション機能を挙げていた点が印象的です。（DOIはアクセス保証の仕組みでしかないにも関わらず）データの引用の話に踏み込んだ点、その後の議論とも相まって、あくまで本プロジェクトは一つの契機であり、解決すべきは研究データの正当な評価である、という高い問題意識が見てとれるように感じました。データの所持や分析力が研究の優位性に直結する現在、データの公開と評価の問題は、研究者にとって一体に議論されるべき事柄、ということなのかもしれません。

最後に、研究データを取り巻く国際的な動向の紹介として、[Research Data Alliance \(RDA\)](#) の活動状況（恒松直幸氏：科学技術振興機構）及びG8や内閣府の動き、その背景となるオープンサイエンスに関する講演（村山泰啓氏：情報通信研究機構）とディスカッションがありました。2012年に創設されたRDAでは、Working Groupの活動として18ヶ月以内に成果物を完成させることが義務付けられており、すでにデータサイテーション、メタデータ規格、ポリシーなどの面で報告が上ってきているようです。昨年末から[内閣府によるオープンサイエンスに関する検討会](#)でも活発な議論がなされており、その概要を聞く限りにおいても、機関リポジトリというプラットフォームを提供する図書館には、非常に近い将来、各大学における研究データ管理体制の構築にあたり積極的な意見表明が求められることになりそうです。

国際的な潮流や社会的要請を背景に、研究者や大学が研究データ管理に対して否応なしに関わらなければならない中、業界としてのスタンスを示すことは急務と言えるでしょう。広くデータ管理に関心のある図書館員が集まり、活発な議論がなされることを期待します。

配布資料等は、JaLCのwebサイトに掲載されています。 <https://japanlinkcenter.org/>

寄稿： 南山 泰之（国立極地研究所）

## 第4回 SPARC Japanセミナー2014

# 「グリーンコンテンツの拡大のために我々はなにをすべきか？」

主催：SPARC Japan(国立情報学研究所)

2015年3月9日に、今年度最後のSPARC Japanセミナー2014が開催されました。テーマは「グリーンコンテンツの拡大のために我々はなにをすべきか？」でした。

現在、国内の機関リポジトリでオープンされているコンテンツは大半が論文です。DRFでも「論文をいかにオープンするか」の議論は、理念的にもノウハウ的にも積み重ねられてきたかと思えます。しかし、大学、研究所等の教育研究機関の活動の成果は、論文だけではありません。標本、研究データ、教材等多様の成果が日々生産されています。今回のセミナーは、研究データ、博物館資料等のコレクション構築やコンテンツの利用促進がテーマでした。機関リポジトリが、コンテンツの多様化にむけて進みはじめるための決起集会、というのが本セミナーの位置づけでした。タイトルの「グリーンコンテンツ」は「学術研究機関が機関リポジトリ等において公開・発信する学術コンテンツ」として本セミナーでは再定義されたもので、通常よく使われるGreen/Goldのグリーンではありません。

セミナーは前半が研究データ、博物館、図書館の視点からの講演、後半がパネルディスカッションの二部構成でした。前半の講演は以下の3本でした。

### (1) 図書館によるデータ管理への道筋 (南山泰之氏：国立極地研究所)

データ管理を巡る情勢をまとめた上で、今後、図書館はどのような役割を果たしていくべきか、IR推進委員会の研究データ班の活動を中心に紹介されました。

### (2) 大学博物館における学術資料情報のオープン化に関する取組み (山下俊介氏：京都大学)

博物館資料のデジタル化の概要、具体的な取組について紹介されました。

### (3) 機関リポジトリとDOI：JaLCにおけるDOI付与について (武田英明氏：国立情報学研究所)

ジャパン・リンク・センター (JaLC) は2014年10月より研究データに対するDOI付与実験プロジェクトも開始していますが、JaLCのDOI付与のポリシーに関して、機関リポジトリ関連を中心に紹介されました。

後半のパネルディスカッションでは、学術資源リポジトリ協議会の堀井洋氏がモデレーター、パネリストは講演者3名と科学技術・学術政策研究所の林和弘氏で、活発な議論が交わされました。参加者からのアグレッシブな発言もあり、若干の時間超過して終了しました。

セミナー全体を通して、図書館の外では、かなりのスピードで論文以外のコンテンツへの対応が進んでいる、ということであらためて認識しました。一方で図書館の中で大きな流れになるまでにはもう少し時間がかかるかも、とも思いました。

講演資料等は下記で公開されます。

<http://www.nii.ac.jp/sparc/event/2014/20150309.html>

三角 太郎 (DRF企画WG、千葉大学)



**募集中!**

## DRF企画ワーキング・グループ員

DRF企画ワーキング・グループでは、一緒に活動して下さる仲間を募集しています。ご参加いただける方はお名前、ご所属、ご連絡先を明記の上、下記までご連絡ください。※応募はDRF参加機関所属の方に限ります。

主な活動内容 ワークショップなどの研修・集会イベントの企画運営、月刊DRFの作成・発行

募集締め切り 平成27年4月30日(木)

応募先 デジタルリポジトリ連合事務局 (北海道大学附属図書館学術システム課) [js@lib.hokudai.ac.jp](mailto:js@lib.hokudai.ac.jp)

(正式な委嘱手続きは事務局からご本人にご連絡します。)



# IRUS-UKが凄い

Amazing IRUS-UK

かたつむりと  
オープンアクセスの日常



機関リポジトリ推進委員会の技術ワーキンググループでは、機関リポジトリの利用統計の標準化に取り組むテーマの一つとしています。以前、千葉大学等の「機関リポジリアウトプット評価の標準化と高度化」プロジェクト（いわゆるROAT）で行われていたような、利用統計の標準化の仕様を決めてログの標準処理も提供することに加えて、なんか格好良く統計が閲覧できるサイトが構築できたらいいよね、みたいな話を楽しくもしています。

その参考になるかと思い、先日IRUS-UKのWebセミナー（いわゆるwebinar）に参加してきました。IRUSとはInstitutional Repository Usage Statisticsの略で、イギリス・Jiscの下で行われている、機関リポジトリの利用統計標準化プロジェクトです[1]。元々、PIRUS2（Publisher and Institutional Repository Usage Statistics）[2]という、論文単位の利用統計標準を定めるプロジェクトがイギリスでは行われていて、IRUS-UKはそのフォロープロジェクトである、とのことでした（Webinarでは「PIRUSからP=出版者がいなくなった」と言っていました（笑…っていいのかな？））。

イギリスとは9時間、時差があるので、日本時間23時から開始というなかなか過酷なwebinarでしたが、眠い目こすりつつ聞いただけの、いやそれ以上の価値があったというか、最低限やりたいと思っていたことはだいたいIRUS-UKで実現されていました。IRUS-UKの特徴を挙げると、以下のとおりです。

- ・現在、78の機関リポジトリが参加している
- ・個々のリポジトリのアクセスログそのものをアップロードするのではなく、リポジトリソフトウェアに追加でコードを仕込んで、ダウンロード情報をIRUS-UKのサーバに送る仕組み（Google Analyticsと同様の方式。そのリポジトリ特化版、みたいな）
- ・学術文献の利用統計標準であるCOUNTERの基準に則って利用統計を標準化
  - 雑誌単位でも個別の文献単位でも集計

- ただしCOUNTERの基準だと人間によらない機械的なアクセス（サーチエンジンのクローラー等）、いわゆるロボットの排除基準が貧弱なので、そこは+αしている

- ・標準処理したアクセス統計を、機関単位でIRUS-UKのWebサイトから閲覧できる
  - 統計は文献ごとの単位、リポジトリ単位、雑誌単位等、粒度を変えて閲覧できる
  - 博論に限定するとか、標準化の基準を変えることもできる
  - 参加している他の機関のリポジトリの比較もできる（いわゆるベンチマーキングに使える）
  - サイト上には、さらに文献ごとのAltmetricスコアも表示
- ・もちろんCSV形式やExcel形式でデータのダウンロードも可能
- ・APIを使ってIRUS-UKから統計情報を取得⇒自分のリポジトリや他のWebページのその統計を表示することもできる

本当、やりたいことの基礎部分（最低限、これはやらないとだよね、という部分）はだいたい押さえてある感じで、利用機関の評判も上々であるとのことですよ。

日本にもこういうサイト、あったらよさそうですね？次年度はそのあたりをがんばっていきたいと思います。

[1] <http://www.irus.mimas.ac.uk/>

[2]

<http://www.cranfieldlibrary.cranfield.ac.uk/pirus2/tiki-index.php>

佐藤 翔

同志社大学社会学部教育文化学科助教。  
ブログ「かたつむりは電子図書館の夢をみるか」  
（<http://d.hatena.ne.jp/min2-fly/>）  
管理人。



**次号予告：**【特集】IR新任担当者研修受講生に聞く！講義内容レポート ほか



Facebookやっています。

<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

編集後記： はじめて月刊DRF編集を担当しました。あらためて月刊DRFの情報量に感動…。ぜひご意見ご感想をお寄せください！（MegYae）

月刊DRF読者アンケート受付中！

[http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf\\_inq.html](http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html)

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 [gekkandrf@gmail.com](mailto:gekkandrf@gmail.com)